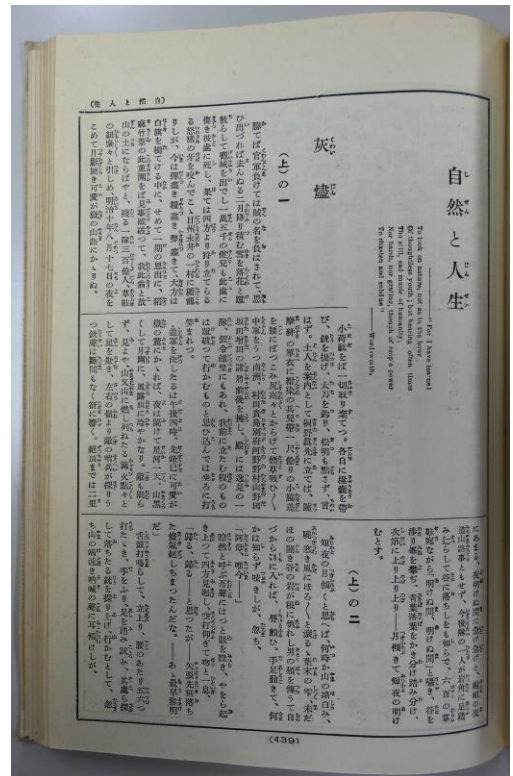


(5)徳富蘆花『灰燼』

2.26事件の歴史的評価とは無関係に、丸山はそこに一種の文学的趣向を感じていた。事件の10年近く前、中学生だった丸山に感銘を与えた小説の一つに、

徳富蘆花(とくとみろか)の『灰燼』(画像『現代日本文学全集12 徳富蘆花集』改造社、1927年))がある。西南戦争を背景に、豊前中津の素封家をテーマにしたこの小説は、

「内乱」というものがそれぞれ性行と立地を異にする個人個人の實在に投げかける深い翳(かげ)が、直接形に



おいてでなく、暗示的に描かれているだけに、かえって一層激しく、私の幼い心をゆさぶった」(「わたしの中学時代と文学」1993年『丸山眞男集』第15巻)。三人兄弟のなかで一人西郷軍にはせ参じ、命からがら敗走して家にたどり着いた少年が、兄から家名を汚す乱臣賊子と罵られ、唯一の理解者と頼んだ母からも見捨てられ、絶望の中で自刃する姿に丸山は感情移入したのである。2.26事件においても、はじめは「決起」と呼ばれていた青年将校たちの行動が、「占拠部隊」から「反乱部隊」と呼ばれるに至り、29日に戒厳司令官による「今からでも遅くはない」の布告が発せられ、鎮圧の対象となるに至った。この布告のなかで繰り返された「逆賊」という言葉に、丸山はとっさに『灰燼』を思い出した。昨日の忠臣が今日の逆賊となり、忠義の心から発した義拳が次の瞬間には私利私欲の悪行三昧と罵られる。忠逆が激しく入れ替わる「内乱」という事態が、丸山の連想を誘ったのであった。